

新島先生を語る

三人の先生

同志社には、創立のころから、三人の特質のある偉い先生がいました。新島先生の勇気は今まで述べましたが、先生の歌に「いしかねも透れかしとて一筋に射る矢にこもるますらおの意地」というのがあります。

もう一人はデビス先生。デビス先生は初めからずっと新島先生と協力しましたが、デビス先生は情熱の人であるといわれます。同志社で問題が起こったときには、夜折って折りつづけたそうです。デビス先生の流す涙は女性の流す紅涙にあらずして、男子のほとばしる万斛の涙であるといわれております。朝起きたときには、涙で枕がずぶぬれになっていたそうであります。

もう一人はラーネッド先生でございます。ラーネッド先生は非常に学問のできた先生でエール大学を最優等で卒業し、学位を得て二十七歳で明治八年に渡日し、九年四月から講義し五十余年を同志社で教えた先生でありますが、聖書神学と教会史の先生でこ

総 長 住 谷 悦 治



ざいますけれども、経済学、政治学その他多くの学問を講義しているのです。

ラーネッド先生のこととは日本の政治学者がよく知っていないと思うのですが、日本の政治学は東大の小野塚喜平次が、「政治学大綱」によって確立したと言われ、早稲田大学の吉村正教授は、早稲田でより早く浮田和民が政治学を確立したといっています。浮田和民は同志社の一期の卒業生であります。ところが浮田和民は明治二十四年にラーネッド先生の「経済学之原理」という本を訳しているのですが、「経済学之原理」という本の中に政治政策における貧困救済策というのを論じております。まことに卓見であります。それ以前に十五年ごろからの講義した中には、「経済新論」という書名で講義を宮川経輝が訳していますが、その中にはこれは貧困救済策とはいっておりませんけれども、日本にはやがて貧乏人が出てくるであろう。そういう貧乏人に対して対決しなければならぬ。政治はこれを救済する義務があるけれども、政治の力で経済政策をやっても力が及ばない。人間は、国民は、必ず自主的にみずからの貧困を改革しようとする。そのため

には共産党、社会党、無政府党、そういうものが出てみずから解放するといふ、そういう思想があるといふことを紹介しているのです。それが明治十二年ころの講義です。もちろんラーネッド先生は社会主義、共産主義、無政府主義には批判的であります。だが経済学といふものによって貧困の基礎を考えて、そうして貧困に対処しなければならぬ。しかしこれでは足らぬ。政府の力も足らぬ。ほんとうに人間を救い、国を救うためには、真正なる経済学と真正なるキリスト教によらざるべからず、と書いています。この言葉を当時聞いた生徒で、たとえば留岡幸助は非常にうまいことをいっている。ラーネッド先生は「右手にバイブル、左手に経済学」でもって日本を救おうとしてきた、と書いてある。なかなか語呂がいいのであります、ラーネッド先生はほんとうに理性・知性の権化であると言われました。

「ラーネッド先生の理性、デビス先生の情熱、新島先生の勇氣」、これが同志社の三つの生きた精神の現われといえます。同志社のマークは、三つ葉のクローバーだといわれ、それは知育、徳育、体育を象徴するといっておりますけれども、どんな学校でも知育、徳育、体育をやらないところはない。知育、徳育、体育は、これは普通の原理であるが、その上に立って徳育は基督教に基づき、新島先生の勇氣、ラーネッド先生の知性、デビス先生の情熱という生きた先生たちの特質をダブらせてもいいと思うのです。あるいは同志社はキリスト教の学校ですから、「父と子と聖霊」といふことをいうてもいいと思います。「望みと愛と信仰」といふことをいうてもいいと思います。とにかく私は単なる「徳育」

が同志社のマークの一つだということには決して賛成しえませぬ。

「洛陽の平民新島襄」

明治七年に帰ってきて、明治二十三年になくなられ、たった十五年間の活動であります。しかもその間、募金運動をつづけ、その後もアメリカにも行きましたし、日本の国内を募金運動で回ってからだをすりへらしてしまつた。そうして明治二十三年の正月二十三日になくなりましたが、そのなくなるときも遺言をしております。新島八重、小崎弘道、徳富猪一郎の三人が立会つたのであります。遺言には次ぎのような簡条があります。「同志社の前途は基督教の徳化、文学、政治等の隆興、学芸の進歩三者相伴ひ相待つて行ふべき事」とか、「同志社教育の目的は……皆精神の活力あり、真誠の自由を愛し、以て邦家に尽すべき人物を養成するを務むべきこと」とか、「社員たるものは生徒を鄭重に取り扱ふ可きこと」とか、「隆盛になるに従い、機械的に流るる恐れあり、切に之を戒慎す可きこと」などが述べられました。

もう一つ同志社としては常にキリスト教であると同時に、大切な伝統の一つは国際平和主義と平民主義であります。それから新島先生のデモクラシーの問題であります。デモクラシーというのは民主主義と訳しております。私らが学生のときには、吉野先生は民本主義と訳しておりました。民主主義は君主主義と対立するから、君主主義を否定するとして国賊視されました。吉野先生は

非常に用心深く民本主義という言葉を使った。民本主義という吉野先生を思い出しますけれども、吉野先生の書いたものを見ますと、民本主義は自分の造語ではない。茅原華山がこれを使ったから、これはいいと思って使ったと言っています。ところが吉野先生は明治三十年代には民主主義という言葉を使っており、大正年間には、民本主義、最後には一般化してから民主主義という言葉を使ってあります。

もう一つは、平民主義という言葉は徳富蘇峰先生の造語であります。徳富蘇峰先生は同志社の中途退学です。徳富兄弟をはじめ同志社では中途退学の者が素晴らしい人が多いのです。蘇峰先生が九十二歳のときに同志社にきて講演して、質問ありませんかというので、私質問しました。「平民主義という言葉は徳富蘇峰先生の造語だと聞いておりますが、ほんとうですか」と。蘇峰先生はたくさんの先生のいるところで「いかに、私の造語です」と答えました。

もう一つは、明治二十九年に徳富蘇峰先生の民友社から出た「現時之社会主義」という本がある。これには著者名がなくてただ民友社発行となっております。これは非常にすぐれた本であります。これは一体だれが書いたのですかと質問したら、蘇峰先生は、これは深井英五に書かせた。深井は非常に英語がよくできた。外国の本をよく読んでいたので、私が彼に書かせた、といいました。これも新しい発見です。

平民主義という言葉は徳富蘇峰の造語ですけれども、新島先生はみずから「洛陽の平民新島裏」と称しておりました。私が問

題とするのは、デモクラシーの意味は政治的のみでなくほんとうにその人の人柄をも意味するので、あの人はデモクラティックな人柄だという場合には政治的な意味を含んでいないのです。ともかくそういうことで新島先生は平民主義に生きました。今でいえばデモクラシーと基本的人権思想に徹していたのでしょう。

先生御在生のころ、松本五平という小使いがおりましたが、これは天涯孤独の幕末の人であります。この五平を堀貞一という初期の生徒が連れてきて、新島先生のまかないに雇って貰った。先生は五平さん、五平さんといって、さんづけで呼んだのです。先生は奥さんのことも八重さん、八重さんと呼んでいた。ところが生徒は、五平、あれをしろ、五平、これをしろと小使いを使つたのに対して五平さんが、おれを五平、五平いうな。新島先生はおれを「五平さん」といってさんづけで呼んでいるぞ、といって抗議を申し込んだという話があります。私は五平さんのことをよく調べたことがあります。五平さんは死んでも、新島先生と一緒に居たいといっておった。そのためには洗礼を受けないと天国に行けないぞといわれて、洗礼を受けてクリスチャンになったそうです。そうして新島先生が二十三年になくなり、五平さんも明治三十六年になくなりましたが、だれが建てたかしりませんが、若王子の新島先生、デビス先生の墓に向って右手の門のところに小さい墓があって、「松本五平の墓、同志社校友有志これを建つ」と書いてありますがほんとうに床しいと思うのです。新島先生は、小使いのことも五平さん、五平さんと呼んだばかりではなく、生徒に私のことを新島先生といわずに新島さんといって下さ

い、そういったそうです。そういうような先生だったわけです。もう一つは、足利武千代という、足利尊氏二十六代の正統の人で、ことし九十八歳でなくなった先輩がおりましたが同志社のそばにある相国寺の大事な檀家であります。小年足利武千代の時代に御所の庭を通って京極小学校に通ったのです。そのころは堀もなく、草原であった。新島先生は寺町丸太町上ルの家から同志社に通う。少年足利武千代は、相国寺から京極小学校に通った。ちょうど御所の中を通るときに、新島先生が向こうから歩いて来られる。この人がえらい新島先生だと思って、少年武千代は丁寧にうしろを向く。新島先生はそのたび帽子をとって丁寧にうしろを向く。これがうれしくて新島先生がくるころを見計らっては、御所の草っぱらで新島先生におじぎをする。そうすると新島先生はまた丁寧にうしろを向く(笑)。そうしてすっかり新島先生を崇拜して、いよいよ小学校を卒業して中学に入るときに、同志社に入る、新島先生の中学に入るといってきかない。相国寺の第一の檀家の息子が耶蘇教の学校に入るとはとんでもないことだということで、管長以下大騒ぎを起こした。しかし武千代少年は断固として同志社中学に入った。これは今年九十八歳で逝いた足利武千代翁から直接聞いた話であります。そのようなことで、新島先生の平民主義というのは徹底的に身についたのであります。

「あるころの歴史」より

著者の承諾を得て転載

(住谷篠部奨学金出版会刊)

〈新島先生のことば〉

吾人は基督教を拡張せんが為に大学校を設立するに非ず、唯だ基督教主義は、実に我が青年の精神と品行とを陶冶する活力あることを信じ、此の主義を以て教育に適用し、更に此の主義を以て品行を陶冶する人物を養成せんと欲するのみ

